

# 大学を拠点とする多職種による子育て支援事業 “子育てコラボサロンどーなつ”の実践

下司 実奈<sup>1</sup>, 曾田 里美<sup>1</sup>, 稲垣 由香里<sup>1</sup>  
菅野 由美子<sup>2</sup>, 丸山 有希<sup>2</sup>, 内 正子<sup>2</sup>

## The practice of the child-rearing support by multiple occupations at a University

Geshi Mina<sup>1</sup>, Soda Satomi<sup>1</sup>, Inagaki Yukari<sup>1</sup>  
Kanno Yumiko<sup>2</sup>, Maruyama Yuki<sup>2</sup>, Uchi Masako<sup>2</sup>

### 要 旨

地域における子どもとその養育者の多様な悩みや問題に対応するために、看護学科と社会福祉学科の教員がそれぞれの専門性を活かして協働する子育て支援事業として“子育てコラボサロンどーなつ”を2018年度に開設した。本稿は2019年度に実施した保育士・幼稚園等専門職を対象とする講座および子育て中の保護者を対象とする講座の活動内容、参加者およびボランティアとして参加した学生のアンケート結果をまとめて報告する。講座の参加者はいずれの回も少人数であったものの、子どもと保護者が安心して参加し、講義や参加者同士の交流を通して子育てに前向きになれるような働きかけができた。また、本事業のコンセプトである「多職種の専門性を活かした協働」と「大学を拠点とした活動」の強みを活かして「子育て支援のコミュニティ形成」に向けて一歩を踏み出すことができた。

キーワード：子育て支援, 多職種協働, 専門職支援, コミュニティ

### I. はじめに

子育てが保護者を中心に血縁・地縁による互助の中で営まれていた頃は、子育て支援という概念は存在しなかった。子育て支援という言葉がいつから使われるようになったのか明確ではないが、『厚生白書』に最初に登場したのは平成2年版

(1990年発行)である(吉田,2009)。高度経済成長による都市化、核家族化の進行のため、血縁・地縁の支えを前提とした子育て機能が低下し、新たな子育ての形として互助に替わる「子育て支援」が求められるようになった。

さらに、2016年に「保育園落ちた日本死ね」のブログが日本社会で大きな反響を呼んでから、子育て支援という言葉は政治や教育、福祉といったあらゆる場面で数多く耳にすることになった。ブログ以前に、子育て支援を求める声は当事者である

1 神戸女子大学健康福祉学部社会福祉学科  
Kobe Women's University Faculty of Health and Welfare

2 神戸女子大学看護学部看護学科  
Kobe Women's University, Faculty of Nursing

父母や家族、また福祉や教育の専門家から長い間、その必要性は訴え続けられていたが、たったひとつのつぶやきからこれだけの拡がりを見せたのはソーシャルメディアの時代ならではと思われる。

しかしながら、大きく社会で子育て支援が取り上げられるようになると「子育て支援に関する情報や専門知識が多様なメディアを通じて提供される一方で、多量の情報に振り回されて疲弊し（中略）その結果として、子育てに負担感や不安を感じ、子育ての失敗を恐れる親が少なくない」（大澤,2020）といった状況になっていることも事実である。そして、周防・中（2019）は「地域子育て支援拠点の支援には、利用親子の多様性に合わせた支援、さらに地域子育て支援のスタッフに求められる専門性が必要とされる」と述べている。

そこで筆者らは、子どもとその養育者の多様な問題や悩みに対応するために、看護学科と社会福祉学科の教員がそれぞれの専門性を活かして協働する子育て支援事業“子育てコラボサロンどーナつ”を2018年度に開設した。本事業のコンセプトは、多職種が協働することに加え、様々なリソースを有する大学を拠点として、子育て支援のコミュニティを形成していくことである。“子育てコラボサロンどーナつ”開設に至るまでのプロセスについては、菅野ら（2021）の報告にある通りである。本稿では2019年度の活動内容とその成果について報告する。

## II. 目的と概要

“子育てコラボサロンどーナつ”が将来的に目指すのは、地域の養育者がいつでも気軽に相談できる場として活用できる子育て支援事業を展開することである。初年度である2019年度の活動は、大学での取り組みを多くの人に認知してもらうために、講座形式で子育てに関する情報提供を中心

に行うこととした。

講座の構成は、筆者らのうち看護学科教員が行った大学周辺地域での子育て支援に関するニーズ調査結果を参考にした。内ら(2017)の調査から、養育者が今後希望する子育て支援として「子どもを預かってもらう」「同年代の子どもを持つ養育者と自由に話ができる」「子ども同士の交流」「子どもと一緒に遊ぶ」「情報提供してもらう」「専門家からアドバイスを受ける」「専門家に自分の悩みを聞いてもらう」等があることが分かった。そこで、具体的な講座の構成として知識を提供する講義の他に、参加者同士の交流を取り入れた。交流は、講義担当教員がファシリテーターとして関り、参加者はお茶を飲みながら気軽に日々の子育ての悩みや対処法などを語ったり、相談したりできる座談会形式とした。

講義の内容は、養育者の多種多様な問題に対応できるよう看護学科、社会福祉学科それぞれの教員が専門性を活かしたテーマを設定した。また、教員免許状更新講習の講義を担当した筆者らの経験から、子どもに携わる保育士や幼稚園教諭も子どもの関わりや保護者対応について学習や相談の場を必要としている実状を知ったため、保育所・幼稚園等で子どもに関わる専門職対象の講座を1回分計画した。

子育て中の保護者を対象とした講座では、保護者が講座に参加している時間に子どもの保育を行った。保育には学生ボランティアが参加し、子どもが安全に楽しく過ごせる環境、保護者が安心して講義や交流の時間を持てる環境づくりに配慮した。

## III. 方法

### 1. 対象と募集方法

講座の対象は、第1回は保育所・幼稚園等で子どもに関わる専門職を対象とし、第2回以降は子育て中の保護者を対象とした。最初に専門職対象の

講座を実施することで、各園の専門職から保護者に講座受講を推薦してもらうことを考慮した。

募集方法は、第1回については神戸市内の339カ所の公私立保育園・幼稚園・認定こども園に“子育てコラボサロンどーなつ”のリーフレットおよびチラシを郵送し、掲示板への掲示を依頼した。第2回以降については、行政（大学周辺の行政管轄区）、自治会（大学周辺地区）等に上記と同様に郵送した。また、大学周辺の幼稚園・保育園・児童館および神戸市中央区の保健センターには、リーフレットとチラシを持参し掲示と配架、子育て支援事業の一つとして紹介してもらうよう依頼した。各回に大学のホームページにてNewsリリースを行った。

## 2. 日時

期間は2019年9月から2020年3月（2月を除く）までの月1回土曜日で計6回計画した。3月に実施予定であった第6回のプログラムは新型コロナウイルス感染拡大により中止した。時間は、第1回の専門職対象の講座は13時～15時、第2回以降の保護者対象の講座は午前10時から12時までの2時間とした。

## 3. 場所

会場は神戸女子大学ポートアイランドキャンパスD館の講義室、演習室、保育実習室で行った。保育実習室は子どもたちの保育に使用した。講義室と演

習室は、参加者が多い回は講義室、少ない回は演習室を利用するよう使い分けた。保育実習室は、講義室・演習室の対面に位置しているため、ドアを開けることで親子分離しながらもお互いの様子が分かる環境となっている。

## 4. 学生の参画

子どもの保育担当として学生ボランティアが運営に参画した。各回の講義を担当する教員が、社会福祉学科では児童福祉に関心のある学生、看護学科では小児看護を学ぶ学生に対して本事業の目的や役割を説明し、学生の意向を確認しながら参画を促した。

## 5. 講座の内容

### 1) 講座の構成

第1回の専門職対象の講座は、90分の講義の後、30分参加者からの質問の時間をとった。第2回以降の保護者対象の講座は、講義と交流会の2部制とし、子育てに関する知識の提供（講義）60分と参加者同士の交流および質問・相談（交流会）60分で組み立てた。交流会ではセルフサービスで入れたお茶を飲みながら自由に話ができる雰囲気をつくった。

### 2) 講義の内容

講義の内容（テーマ）は表1に示す通りである。具体的な講義内容は、各回の講座の様子を

表1：2019年度 講座内容

回	日程	講義タイトル	対象者	担当者
第1回	9/28(土)	気になる子どもたちの発達とサポート	保育所・幼稚園等乳幼児に関わる教職員	社会福祉学科 下司
第2回	10/26(土)	子どもとほっこりコミュニケーション	子育て中の保護者	社会福祉学科 曾田
第3回	11/16(土)	家庭内で起こりやすい乳幼児の事故の予防と対処～ヒヤッとしたことありませんか～	子育て中の保護者	看護学科 内
第4回	12/7(土)	知っておきたい子どもの感染予防と予防接種	子育て中の保護者	看護学科 菅野
第5回	1/25(土)	子どもとことばの発達	子育て中の保護者	社会福祉学科 下司
第6回	3/10(土)	親子で知ろう、からだのふしぎ (コロナ禍のため中止)	子育て中の保護者	看護学科 丸山

含めて後述する。

## 6. 運営教員の役割分担

“子育てコラボサロンどーなっ”の運営に携わるのは看護学科教員3名、社会福祉学科教員3名の計6名である。各講座には、講義を担当する教員の他に1名以上の教員が参加するようにした。その際、講義担当者を含めて看護学科と社会福祉学科の教員が少なくとも一人ずつ参加できるように人員配置を工夫した。専門分野に拘らず、多様な視点から参加者の悩みや問題に対応するためである。

子どもの保育には、保育を必要とする子どもに応じた人数の学生ボランティアと教員1名を配置した。教員は基本的に学生と子どもたちの関りを見守り、子どもが泣くなど学生が対応に困惑する場面ではアドバイスしたり、自ら対応して見本を示したりした。

## 7. アンケート調査の実施

### 1) 実施方法

講座の参加者および学生ボランティアに対して各回の講座終了時に無記名自記式のアンケート調査を行った。調査内容は、参加のきっかけ、参加理由、講座の満足度等である。

### 2) 倫理的配慮

講座開始時、参加者に対して本事業が研究助成を受けて実施していること、研究の目的として事業評価のためのアンケート調査を実施することを口頭にて説明した。講座終了時には、アンケート調査の説明をし、調査協力は自由意思であること、無記名での回収および結果は統計的処理により個人が特定されないこと、データは厳重に管理すること、研究成果は紀要等に情報公開すること等を記載した文書を用いて口頭で説明した。なお、本調査研究は神戸女子大学の人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得

て実施した(承認番号2019-11-1)。

## 8. 各講座終了後の振り返り

保護者対象の各講座終了後に参加教員と学生ボランティアと30分程度の振り返りの時間を設けた。講座の内容、参加した保護者の様子や言動、子どもの発達や遊びの様子、保護者と子どもの関係性などについて意見交換、意味づけをし、情報共有と学生が学びを深める機会をもった。

## IV. 結果

### 1. 参加状況

各回の参加者数は表2の通りである。第2回以降の保護者対象講座の参加者は10名(延べ17名)であった。そのうち2名が第2回から第5回まですべての回に参加した。なお、参加募集は回ごとに行い、参加者は参加したい回あるいは参加できる回に申し込む形であった。第2回以降の学生ボランティアの参加は、12名(延べ13名)であった。

表2：参加状況

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
参加者(人)	10	4	3	2	8
子ども(人)	—	3	3	3	7
学 生(人)	—	3	2	2	6

### 2. 専門職を対象とした講座の様子および参加者アンケート結果

#### 1) 講義内容と講座の様子

第1回「気になる子どもたちの発達とサポート」発達遅れの遅れやねじれを抱えている気になる子どもたちに対して、その行動を観察し気になる行動には必ず理由があることを知り、大人が対応を変えることで、子どもたちの発達を促すことができること、その具体的な対応について解説した。講義後には各園で実際に気になる子どもたちや保護者対応について参加者から質問が出た。

## 2) 参加者アンケート結果

### ① 参加者の概要

図1は参加者の保育士・幼稚園教諭としての経験年数を示したものである。10年以上が60%、5～10年未満が20%であり、5年以上の中堅職員の参加が80%を占めていた。図2の参加者の勤務先は、認定こども園が50%、次いで保育所が20%であった。その他には児童発達支援センター、母子生活支援施設が含まれていた。図3の勤務地は大学のある中央区が30%と最も多く、神戸市内にとどまらずその他には姫路市、尼崎市もあった。図4に示される参加理由は、複数回答可で「内容に興味があった」(45%)、「今後対応に役立ちそうだから」(44%)が多く、個々の職員の判断で参加していることが伺われた。

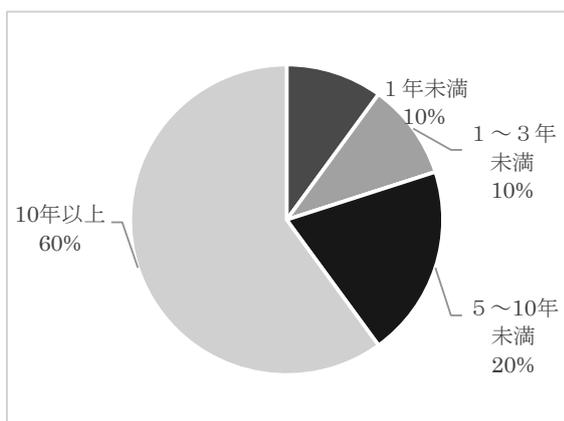


図1：経験年数

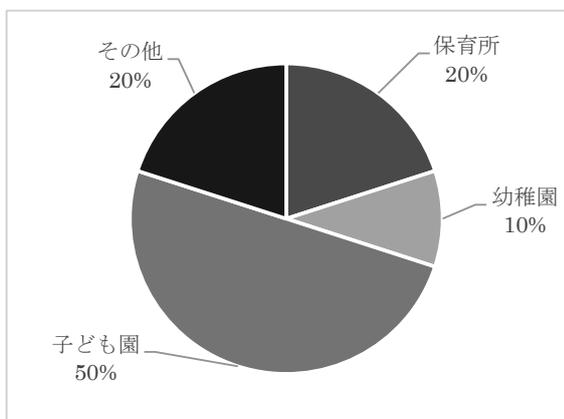


図2：勤務先

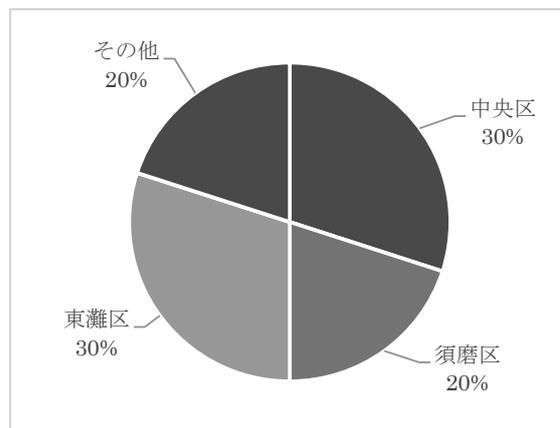


図3：勤務地

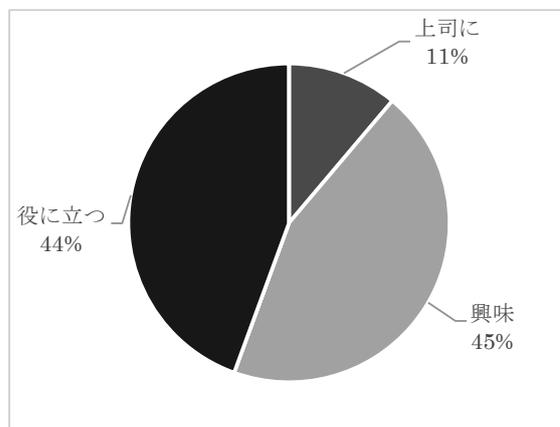


図4：参加理由

### ② 参加者の満足度等

講義内容の理解度については、「よく理解できた」(90%)、「多少理解できた」(10%)であり、合わせると参加者全員が理解できたと回答した。参考度についても同様に全参加者が参考になったと回答した。講座全体の満足度については、「とても満足」(70%)、「やや満足」(30%)を合わせて全参加者が満足していた。

### ③ 参加者の感想・意見 (自由記述より)

自由記載された感想・意見をまとめると、「分かりやすく大変参考になった」「具体的な事例もあり疑問に思っていたことがつながっていき理解が深まった」という講座全体の感想の他に、「子どもの行動をよく観察する」「子どもの行動

を受け入れていく」「状況や子どもにあった言葉かけや援助をしていく」等、講義内容を参考に今後の子どもとの向き合い方や関わり方を見直していくことが記載されていた。

### 3. 保護者を対象とした講座の様子および参加者アンケート結果

#### 1) 講義内容と講座の様子

##### 第2回「子どもとほっこりコミュニケーション」

子どもとの適切なコミュニケーションのために子どもの状態や感情を汲み取り、それを伝え返すことによって、そこで起こっていることを「共有する」意味について実例を出しながら解説した。また、どこの家庭にも起こりうるいくつかの場面を提示し、保護者に「子どもの気持ち」と「親の言葉」を出し合ってもらいながら、それぞれのコミュニケーションのあり方について振り返った。

##### 第3回「家庭内で起こりやすい乳幼児の事故の予防と対処～ヒヤッとしたことありませんか～」

子育て中の家庭において乳幼児の予期せぬ行動によっておこる事故をテーマに、イラストを用いながら入浴時に起こる事故、転落や転倒による怪我、台所や暖房器具による火傷など事例を挙げて、保護者が注意するポイントと事故が起こったときの対処法を解説した。後半は講師と保護者がこれまでにヒヤッとした体験を語り、その時にどのような対応をしたか、どうしたら事故が防げたか、対応は正しかったかなど意見交換した。

##### 第4回「知っておきたい子どもの感染予防と予防接種」

乳幼児がかかりやすい感染症について取り上げ、感染経路、感染期間、症状、予防接種、家庭での予防法、登校基準、感染した人の吐物の処理方法など詳しく説明した。講義の後は、保育室で遊ぶ子どもたちに参加してもらって手洗

いトレーニングを行った。検査器のグリッターバッグを用いて手洗い後の細菌の落ち具合を確認したり、衛生的手洗いの動画を見ながら手洗いをしたりして、感染症を予防する手洗いを親子で楽しみながら学んだ。



写真1：グリッターバッグを用いた手洗いトレーニング

##### 第5回「子どもとことばの発達」

乳幼児期の子どもたちの発達の道筋を示しながら、「乳幼児の発達の目安」「イヤイヤ期は大切」「話すだけではない様々な子どもたちの表現力」「大人からの言葉かけ」「親としての力量を知る」などをテーマに取り上げて解説した。また、子どもへの肯定的な言葉かけが、親にとって自己肯定感の向上につながっていくという子育てのヒントを提示した。後半は保護者から子どもの行動や言葉に関する不安や悩みについて多数の質問が出て参加者で共有した。

#### 2) 参加者アンケート結果

##### ① 参加者の概要

参加した保護者の年齢は図5の通り、30代が70%を占めていた。図6の子どもの就園先は、未就園と幼稚園がともに42%であった。子どもの年齢は尋ねていないが、3歳未満児（未就園）と3歳以上で幼稚園に通う子どもをもつ保護者の参加が多いことが分かる。図7の参加

者の居住地は、中央区が65%を占め、広報に力を入れた大学のある中央区からの参加が多かった。図8の本事業を知ったきっかけでは、チラシ(47%)、次いで友人・知人から(35%)であった。チラシやパンフレットを可能な限り少しでも多くの場所に配架したり、事業の存在を広く知り合いに伝えたりする広報活動の必要性が伺われた。図9の参加理由については、「知りたい内容だったから」(57%)、次いで「おもしろそうだなと思ったから」(38%)であった。常に保護者のニーズ把握に努め、保護者の興味・関心のある内容で講座や活動を展開していくことが必要だといえる。

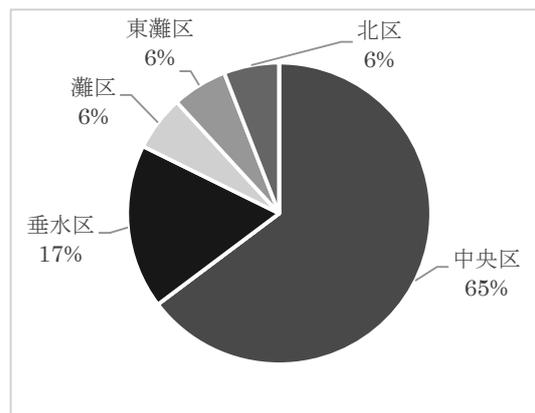


図7：居住地

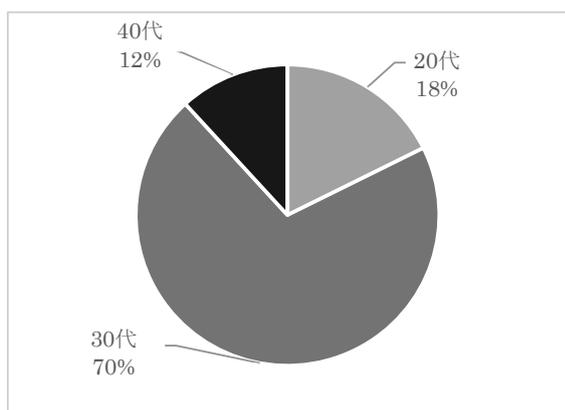


図5：年齢

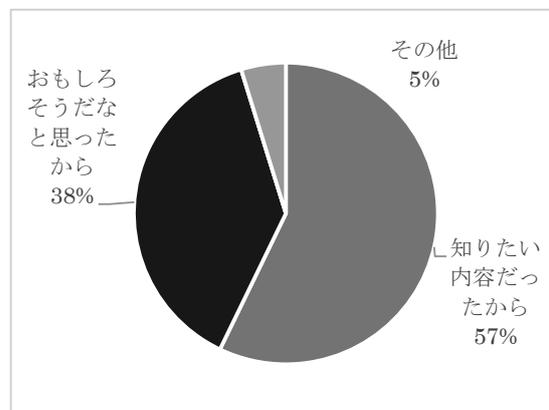


図8：参加理由

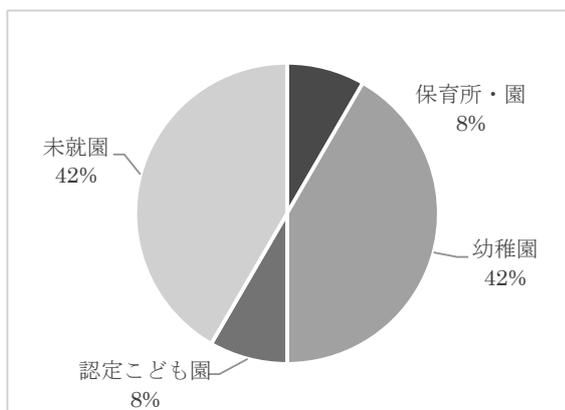


図6：子どもの就園先

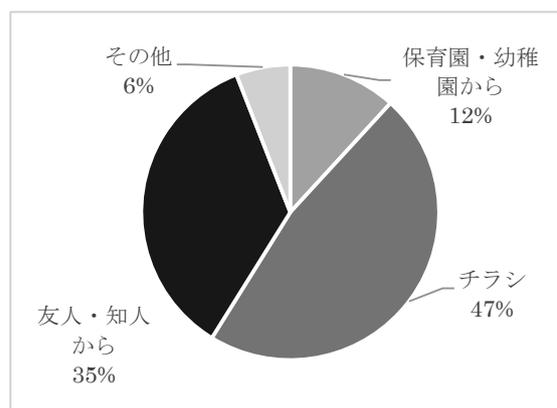


図9：本サロンを何で知ったか

## ② 参加者の満足度等

講義内容の理解度については、「よく理解できた」の回答が100%であり、参考度については、「参考になった」(94%)、「参考になった」(6%)

を合わせ全参加者が参考になったと回答した。講座全体の満足度についても同様に「とても満足」(94%)と「やや満足」(6%)を合わせ全員が満足していた。

### ③ 参加者の感想・意見(自由記述より)

講義の全体的な感想では、「今の子どもを理解する上で、大変役立った」「具体的な話が興味深くおもしろかった」「これからやってみようということも教えてもらえた」等みられた。また、勉強になった・役立った理由として、「妊娠期には講座など学べる機会があったが、育児期になるとそのような機会が少ない」「ネット育児では本当に断片的なことしか知ることができない」という意見も挙げられた。

看護学科教員が担当した講座では、「具体的な方法が分かったので家で意識して予防に努めたい」「具体例を聞くことでイメージできて勉強になった」「消毒のことや商品についてとても勉強になった」等の感想がみられ、すぐに生活に取り入れることができる対処法を学べたことが伺える。社会福祉学科教員が担当した講座については、「自分の今までの子どもへの対応を振り返ることができ、親が子どもを「認める」「褒める」「共感する」「肯定的な言葉がけをする」等の大切さに気づき、「今後の対応を前向きに考えることができた」「これからの子育て・子どもとの関わりが楽しみになった」という感想があった。

講義後の交流会の感想として、「講師の先生が私たちの話もよく聞いてくれた」の他に、「いろいろなお母さんからの体験を聞いて勉強になった」「同じように悩みを抱えている保護者の話を聞くことができて不安が安心に変わった」「子どもはまだ幼いが、今後の子どもの関わり方を学べて良かった」等みられ、保護者と

して互いに学び合うことが有意義だったことが伺われる。また、保護者でもあり保育士でもある参加者からは、「保護者同士が話せる環境も大切にしたいと改めて思った」という感想がきかれた。

## 4. 学生ボランティアによる保育の様子と学生アンケート結果

### 1) 保育環境と保育の様子

講座を実施している間は、教員1名と学生ボランティアが子どもの保育を実施した。保育場所は、講座を実施した教室の対面の部屋を使用し、親子双方がすぐに姿を確認できるように配慮した。参加した子どもの年齢は1歳未満から4歳で、学生ボランティアがそれぞれの子どもに付き添い遊びを見守った。子どもの月齢が幅広いことや玩具、絵本等をたくさん備えた部屋であることから、設定した遊びは行わず、各自が自由に遊べるようにした。参加した子どもは、初回は、場所と人に慣れるまで時間を要したが、時間が経つにつれ、見たことのないロフト付きの小屋や木の玩具などに触れ、学生ボランティアとともに、それぞれにお気に入りの遊び方を見つけて楽しむ様子がみられた。2回目以降は、子どもが保育室で遊ぶことを楽しみにしていたという声が保護者から聞かれ、参加した子どもにとって、親の存在を近くに感じながら安心して遊べる場になっていたといえる。

学生たちは、普段の生活の中で子どもと関わる機会が少なく、保育開始時にはどのように接してよいか分からず、戸惑う様子がみられた。同席している教員の子どもへの関わり方を見ながら、子どもに合わせた対応を学ぶよい機会となったようである。講座終了後には学生ボランティアと教員が振り返りの時間を持ち、子どもの様子や対応などを話し合い共有した。



写真2：学生による保育

## 2) 学生アンケート結果

参加した学生の所属学科は、社会福祉学科(67%)、看護学科(33%)であった。学生ボランティアは講義を担当する教員が、参加者の人数に応じてボランティアを募るようにしていた。第5回の社会福祉学科教員担当の参加者が多かったため、学生ボランティアも社会福祉学科が多かった。学年については、1年生(38%)、2年生(31%)、3年生(0%)、4年生(31%)であった。看護学科、社会福祉学科ともに3年生は学外実習があつて多忙なため、ボランティアの誘いを控え、実習前の1、2年生に意識的に呼びかけていたことが伺われる。学生がボランティアに参加した理由では、「内容に興味があったから」、「先生に誘われたから」がともに36%と多かった。

今回のボランティアのやりがいについては、「やりがいがあった」(85%)、「まあまあやりがいがあった」(15%)と回答し、全員がやりがいを感じていた。また、今回の経験が有意義だったかについては、全員が「有意義だった」と回答した。有意義だった理由ではほとんどの学生が、「普段子どもと関わることがないので貴重な体験ができた」ことを挙げていた。「はじめは反応のなかった子どもがだんだんと反応して

くれるようになり、子どもからも話しかけてくれるようになった」という子どもの変化に喜びを感じる声もあった。今回の経験が今後役に立つかについては、「役に立つ」(92%)、「少し役に立つ」(8%)であり、全員が今後役に立つと感じていた。役に立つ理由として「年齢に合わせた遊びを考えながら一緒に遊ぶことが出来て、発達を考えることが出来た」「実際の子どものたちの発達を見て学習した内容がより理解できた」ことを挙げていた。

## V. 考察

### 1. 2019年度の活動の振り返り

2019年度の“子育てコラボサロンどーなつ”の活動は、広報に尽力したものの知名度のないところからのスタートであったため、参加者を集めることは難しく、いずれの回も少人数の参加であった。そこで、少人数であることの強みを活かして、講義のときから参加者の反応をみながら双方向のやり取りをし、交流会では用意した一杯の紅茶やコーヒーを飲みながら参加者が気軽に不安や悩みといった本音が出せるような雰囲気づくりに努めた。その結果が、参加者アンケートによる講義の理解度や参考度、講座全体の満足度の高い評価につながったといえる。しかしながら、少人数であることが、参加者による高い評価を促していることも考えられる。理解度や満足度に関する質問項目に加え、要望や改善点、参加者のニーズ等について率直な意見が聞けるような項目の整理が今後必要であると考えられる。

### 2. 事業コンセプトの観点からの振り返り

ここでは“子育てコラボサロンどーなつ”の事業コンセプトである「多職種の専門性を活かした協働」「大学を拠点とした活動」「子育て支援のコミュニティ形成」の3つの観点から活動を振り返

り考察する。

1点目の「多職種の専門性を活かした協働」について、学科を超えて教員が連携するという試みは、総合大学ならではの本事業の大きな特徴である。神戸市内において、多くの大学が子育て支援事業を行っているが、保育者による場の提供や遊びの提供が主な活動であり、本事業のように多職種が協働して運営に関わる事業はみあたらない。

実際に講座内容は、家庭での事故や病気（感染症）を学び日々の予防や対処に活かすものと、子どもの発達やコミュニケーションを振り返りながら子どもへの関わりを考えるものを組み合わせた。参加者アンケートの自由記述には、前者では育児書等では得られない専門的な知識とともに、すぐに生活に取り入れられる情報が得られたこと、後者ではこれまでの自身の子どもの見方や対応に気づき、今後の子どもの関わり方のヒントを得られたことが記され、子育てにおける多様な視点からの支援が提供できたといえる。

また、講義後の交流会では、講義を担当した教員がファシリテーターとなり、他に講義担当者と異なる専門分野の教員が同席するようにした。看護と福祉という多様な視点から参加者の悩みや問題に対応するのが狙いであったが、実際は専門分野外の教員が参加者の立場で自身の子育てや支援者としての経験を話すことで他の参加者の発言を促していた。内ら（2017）の調査によると、乳幼児の養育者は「子育てを終えた女性から子育てについてアドバイスを受ける」ことも希望している。交流会での専門分野外の教員は、子育て経験豊富な先輩という立場で参加者に関わり、参加者の安心感のある学びに貢献していたのではないだろうか。交流会に多職種が入ることによって実現できた協働といえる。

2点目の「大学を拠点とした活動」については、

拠点を大学に置くことで活用できるリソース（環境、人材）が多いという利点がある（菅野ら, 2021）。本事業の環境面では、講座の内容や参加人数に応じて使用できる講義室と演習室、子どもの保育を行うための保育実習室を利用した。保育実習室は屋根付きのロフトや木の玩具など子どもが主体的に遊べるように発達に合わせた遊具を整備した安全な遊び場になっている。また、講義に使用した部屋の対面に位置するため、保護者と子どもがお互いの様子を感じながら安心して過ごすことができる。岡田ら（2010）は、大学を拠点とした子育て支援を考えるうえで、「広い遊び場」「安全な遊び場」「屋内の遊び場」「同年齢の子どもとのふれあい」「遊具の充実」といった安心で安全な遊び場は重要な要素と捉えている。保護者が継続して事業に参加するためにも、子どもたちが「また行きたい・遊びたい」と思えるような魅力ある場を用意することは大切だといえる。

人材面については、学生の参画を促すことで運営のマンパワーを確保することができる。また、学生にとって子育て支援事業に参加することは、生きた教育現場で多くの学びを得ることができる。吉岡（2020）は、大学での子育て支援は「地域の子育て家庭を支えると共に学生が支援者として力量を形成することが目指されている」と述べている。本事業における学生の参画は、保護者が受講中の子どもの保育であったため、講座中の保護者の話し合いの場に学生は同席しないが、終了後の振り返りの時間には学生も参加し、講座の内容と共に保護者からの発言とその意味付けを教員と共有した。その結果、学生からも参加したことが「有意義であった」という感想が得られ、教育効果がみられた。このように大学を拠点とした子育て支援事業は、学生たちが「今、ここ」にいる子どもや養育者の喜びや悩みにダイレクトに出会

い、養育者と専門職である教員とのやり取りに触れ、座学では学べない学習経験をすることに意義があると考えます。

3点目の「子育て支援のコミュニティ形成」について、本事業は開設当初から子どもと養育者を中心に置き、彼らのニーズに沿った活動を重視してきた。そして講座の中に参加者同士が子育ての悩みや対処法を語り合ったり、相談したりする交流の時間を組み込んだ。内ら（2017）の調査による養育者の子育て支援ニーズに基づき、前半の講義では「情報提供してもらおう」というニーズを満たし、後半の交流会では「同年代の子どもをもつ養育者と自由に話ができる」「専門家からアドバイスを受ける」「専門家に自分の悩みを聞いてもらう」を満たすように考えた。養育者のニーズに沿ったプログラムを意識したことが、参加者アンケートの高い満足度につながったといえる。

講座では保護者の不安や悩みに対して講師が答えるだけでなく、保護者同士の共感が生まれ、「そうだよね、分かる」といった受容や、「私はこうしているけど」といった提案が自然と出てくる場面が数多くあった。吉岡（2020）は高等教育機関における子育て支援を論じる中で「保護者は支援を必要とする場面もあるが、本来成人としての力量があり、支援を受けるだけの存在ではないことは明確にすべきである」と述べている。保護者が専門家の話を聞いて新しい知識を学ぶことにとどまっていたら、支援の方向が一方向的なものになってしまう。保護者が自身と我が子に合った子育てスタイルを見つけ出し、それを共有していくことが大切である。子育て支援のコミュニティを形成していくためには、保護者が学び合い、保護者自身が養育力を高めていけるような関わりが必要だといえる。

また、子育て支援においては、子どもと養育

者とともに、日々その子どもと養育者に関わる支援者もコミュニティの1リソースと捉えることができる。保育所や幼稚園、認定こども園では、発達障害、子どもの貧困、子ども虐待等の多様な課題をもつ家庭が増え、気になる子どもや保護者への対応に支援者が困難を抱えている。さらに、今日の保育所や幼稚園、認定こども園では子どもの保育や教育とともに、その保護者への支援や地域の子育て家庭への支援が求められている。“子育てコラボサロンどーなつ”では、このような現状を受けて、保育士や幼稚園教諭といった専門職を対象とする講座を組み入れた。今回は気になる子どもたちの理解と支援をテーマにしたが、参加者アンケートの満足度は高く、自由記述では講義内容を参考に今後の子どもとの向き合い方や関わり方の見直していくことが記されていた。子どもや保護者に関わる支援者の質を高めることは、子どもや保護者への間接的支援につながる。支援者を含めた子育て支援のコミュニティ形成が今後必要になると考える。

## VI. 今後の課題

“子育てコラボサロンどーなつ”の活動はスタートしたばかりである。地域で認知してもらうためには、子どもや養育者のニーズに応じてプログラムを改良しながら継続していくことが重要であると考えます。次年度以降の講座では、今回実施できなかった子どもと保護者が一緒に楽しみながら学ぶ「親子で知ろう、からだのふしぎ」の他に、親子マッサージ、保護者が育児の疲れを和らげるリラクゼーションなど、心理教育的アプローチに偏重しない多彩な内容を組み入れる予定である。また、岡田ら（2010）は、大学における子育て支援事業の認知度を広めるために、大学での事業開催だけでなく、地域の子育て支援に関する連絡会等

に参加することや地域の子育て支援事業に出前講師として教員・学生が出向くことなどを挙げている。本事業としても、教員の専門性に応じた個別またはグルー相談会の開催や、アウトリーチによる出張講座等を取り入れながら地域との関係づくり、大学を拠点としたコミュニティ形成につながる事業展開を図ることが今後の課題である。

### 【謝辞】

今回の子育て支援事業については、2019年度行吉学園教育研究助成を受けて実施したものである。学部学科を越えて行なう共同研究として、“子育てコラボサロンどーナツ”に参加しアンケートに答えて下さった参加者の皆様と、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

### 【利益相反】

本研究における利益相反は存在しない。

### 【引用文献】

内正子・丸山有希・吉竹佐江子・西方弥生・菅野由美子・下敷領須美子・田村康子・牛越幸子・岡本恵 乳幼児期における子育ての現状と看護職に対する支援ニーズ—大学周辺のコミュニティの調査—, 神戸女子大学看護学部紀要, 2, 11-20, 2017

大澤朋子 地域を基盤とした子育て・子育ての保障, 実践女子大学生生活科学部紀要, 57,55-65, 2020

岡田由香・緒方京・神谷摂子・大林陽子・志村千鶴子・佐久間清美・金尾洋治・高橋弘子・恵美須文枝 大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み—大学と地域の連携促進モデル事業の活動報告3—, 愛知県立大学看護学部紀要, 16, 41-47, 2010

菅野由美子・内正子・丸山有希・曾田里美・下司実奈・稲垣由香里 大学を拠点とする多職種による子育て支援事業開設に向けての取り組み, 神戸女子大学看護学部紀要, 6, 29-38, 2021

周防美智子・中典子 地域子育て支援拠点事業における子育て支援効果と課題, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 26, 115-124, 2019

吉岡亜希子 養成校における子育て支援～社会教育実践としての可能性—特別な支援を必要とする子どもとボランティア学生、親が紡ぎ合う学習活動から—, 北海道文教大学論集, 21, 65-77, 2020

吉田ゆり 子育て支援の展開とまちづくりの関連について, 現代社会研究科論集, 3, 69-81, 2009